

©Hideki Otsuka

小山実稚恵 152
ピアノと私

ホールは楽器

私は昨年がデビュー40周年でしたが、デビューのころはバブルの絶頂期でした。平日の夜でも都内ではあちこちのホールでコンサートがいくつも重なっていました。私の趣味は舞台鑑賞でしたので、ピアノはもちろん、オーケストラもバレエもオペラも…とにかくいろいろ観て聴いていました。ライブの舞台には魔力があります。なにかひとつ観るとそれが引き金となって次々と観ないではいられなくなってしまうのです。今思えば、あの頃は本当に贅沢で面白かった。でも、ちょっと落ち着きもなかった日々でした。

オーケストラとの公演などは、1回で全国10カ所ぐらい巡るような、長いツアーもありました。外来のオーケストラも2週間ぐらいかけて全国ツアーを行っていたのですから、今では考えられないことです。

コンサートの多くは各地の県民会館や市民会館のような多目的ホールでした。今ではクラシックと言えば、音楽専用ホールで行われる感覚がありますが、当時はまだ数えるほどしかありません。ちょうどその頃、東京で初めてのコンサート専用ホールとして誕生したのが、今年40周年を迎えたサントリーホールです。

私が最初にホールの音を意識したのは、大学4年のとき、東京芸術大学の卒業演奏会が行われた東京文化会館の大ホールでした。ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番を芸大オケと共演したのですが、初めての広いホールでの演奏で、空間を飛んで行く音がくっきりしていることにビックリしました。それは普段家や学校の練習室で弾いていた音とは全く違うもの。ホールでしか感じられない音。音が体にしみわたるような気がしました。

その後音楽専用ホールでの音の響きも経験しながら、耳も変わってきた気がします。音の受けとめ方も徐々に変化してきたのでしょう。若いときは、とにかく演奏することに一生懸命で、ホールの響きを余裕を持って聴けていなかった気もします。

最近、かつて訪れたことのある多目的ホールでリサイタルを行う機会がありました。最初のころの印象とは違って音が熟成されて素晴らしい響きになっていることを感じました。もちろん、自分の耳や音の受けとめ方が変わったこともあるのでしょう。でも、それだけではないように感じたのです。

そこで思ったことがあります。ホールはたくさんの聴衆と演奏者と共に、何十年という年月を過ごしています。ホールの壁にはいろいろな音が反射し合い、また人々の呼吸も吸い込まれていく。たくさんの音を受け止めながら、ホール固有の音を作り上げているのです。成長しているホール。結局は、ホールは楽器なのだと思うのです。M

公演情報

小山実稚恵の室内楽・新章　第4回
12月5日（土）14:00
第一生命ホール
矢部達哉（ヴァイオリン）
宮田大（チェロ）
ベートーヴェン：
チェロ・ソナタ第3番、ヴァイオリン・ソナタ第9番「クロイツェル」
ピアノ三重奏曲第7番「大公」
問い合わせ：トリトンアーツ・チケットデスク
☎03-3532-5702

～夢のかけはし～
蘭島閣ギャラリーコンサート
12月19日（土）18:00
蘭島閣美術館
ショパン：ノクターン第15番、ポロネーズ第1番、幻想ポロネーズ
シューベルト：ピアノ・ソナタ第21番
問い合わせ：蘭島文化振興財団
☎0823-65-2029

関内ホール40周年記念
小山実稚恵 ピアノリサイタル
12月24日（木）14:00
横浜市市民文化会館 関内ホール大ホール
ショパン：ノクターン第15番、ポロネーズ第1番、幻想ポロネーズ、アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ
シューベルト：ピアノ・ソナタ第21番
問い合わせ：関内ホールチケットカウンター
☎045-662-8411

KOYAMA MICHIE 東京藝大卒、同大学院修了。1982年チャイコフスキー国際コンクール第3位。85年ショパン国際ピアノコンクール第4位。「12年間・24回リサイタルシリーズ」（2006～17年）や「ベートーヴェン、そして…」（19～21年）は、その演奏と企画性で高い評価を受けた。2022年より、サントリーホール・シリーズ「Concerto〈以心伝心〉」に続き、ソロ・リサイタルのシリーズ〈未来永劫〉を開催する。ショパン、チャイコフスキーの二大コンクールなどの審査員も務める。17年度紫綬褒章を受章。仙台での「こどもの夢ひろば」のゼネラル・プロデューサーを務める。